

## は し が き

国際関係とは、多様なアクターが国境を越えて織り成す複雑な相互作用である。それを理解しようとする学問的試みも簡単ではない。そもそも国際関係の何を考察の対象とすべきなのか。どのように真理を探求するのか。得られた知見が正しいことをいかに証明するのか。こういった学問の根本にかかわる問いをめぐっても論争が存在している。

国際関係論の古典的名作『危機の二十年』の中でE・H・カーが記したように、戦争の惨禍を防ごうとする使命感を帯びた目的意識はこの学問を志す人々の間に当初は共有されていたと言える。ほどなくして戦争を防ぐために現実を冷徹に受け止めなければならない、とする主張が力を持ち始める。防ぐ一番の手立ては国家間の勢力の均衡を図ることであり、同盟関係を駆使してバランスをとる重要性が強調された。

はたしてこれまでの私たちの歩みは戦争の惨禍を防いできたと言えるだろうか。この点を考えることは国際関係を学ぶ上で中心的な課題となる。戦争に至る過程、戦争後の状況、いわば歴史の大きなうねりを掌握することが重要になる。西欧国家システムの世界化の過程で生ずる文明間の軋轢、台頭する新興勢力とのバランスを図ろうとする試みの破綻、独裁者との宥和が招く侵略、これらは結果として凄惨な殺戮を歴史に刻印することにつながった。世界史の教科書には太字で戦争として記述されている事項である。

『映画で学ぶ国際関係』を世に問うたのは2005年だった。それから8年経って、当然のように新しい映画もどんどん製作、発表されている。また第1弾で紹介できなかったものの、国際関係を学ぶためには見逃してほしくない映画も数多く残っていた。8年は長い歴史の道のりから見れば、ほんの一瞬かもしれない。しかしこの間にグローバル化はなお一層深まり、初のアフリカ系米国人の米大統領が登場し、日本では民主党政権が生まれて崩壊した。中国の台頭は目覚ましく、原発への信頼は揺らぎ、日本の存在感は低下した。リーマン・ショックで米国の経済は深く傷つき、EUはノーベル平和賞を受賞したものの域内の経済は不安定で、日中関係は冷え切った。

国際関係の動きは急流の流れのように激しく、その下でとうとうと流れる大きなうねりを見定めることはこの上なく難しい。それでも地域の激変の意味を捉え、争点の帰結に思いをめぐらせて大きな歴史の流れをつかみたい。ここで紹介した映画を観賞することは、実はそうした難題に立ち向かうヒントを得ることにつながる。なぜなら、そこで描かれるのは人間であり、民族であり、国家であり、人類そのものだからである。私たちは映画を通して、自分の生きる世界をいわば客観的に認知する。勿論映画は物語であって、真実をそのままに描いているものではない。しかしたとえ物語であっても人々は、作品が伝えようとするメッセージを何らかの形で受けとめることになる。そのようにして映画という総合芸術に触れることは、国際関係を学ぶ上での感性を醸成するのにも役立つことだろう。

映画が重要な歴史の断面をどのように描き、それが国際関係を考える上でいかなる視座を提起するものかを解説してゆく。またそれぞれの地域の理解に資する場面に注目を促す。さらには映画に描かれている争点を自らの問題として捉え、鋭い問題意識を生み出す土台を強固にし、解決策を思案する創造性を刺激する説明を付してゆく。関連する他の映画作品とあわせて、同じ歴史的事例の客観的解釈の試みとなっている専門書、あるいは学術論文も適宜紹介している。その点では、国際関係の初学者のみならず、既に一定の学習を積んだ大学生、大学院生にも興味深く読んでもらえるのではなかろうか。

本書は第I部「歴史を歩む」、第II部「地域を観る」、第III部「争点を探る」で構成されている。それぞれの作品に“**Story**”、“**Angle**”、“**Eurohistorism**”のセクションがある。“**Story**”はあらすじを説明している。結末が書かれている場合も多いので、映画を純粋に楽しみたいという読者はここを後回しにする方が良いかもしれない。“**Angle**”には国際関係を学ぶ上でのヒントが散りばめられている。“**Eurohistorism**”は他の関連作品紹介、文献紹介、補足説明など、筆者のもう一言が付け加えられている。

今回も、いや前回の数倍も法律文化社の小西英央氏にお世話になった。第1弾と同じ言葉でしか表現できないのがもどかしいが、心より御礼申し上げます。

2013年2月

編 者